

## 第3章 藤田恵璽先生に学ぶもの

伊 藤 秀 子

メディア教育開発センター

序でのべたように、故藤田恵璽先生は、放送教育開発センターの創成期からセンターの研究開発に多大な貢献をしてこられた。ご略歴にあるように、在職期間は9年間（1985-1994）であったが、ご退官を待たずに聖心女子大学に移られてからも、客員教授として私達の研究プロジェクトを常にご指導くださった。しかし、1997年8月16日に惜しくもご逝去された。まだ、64歳というお若さであった。

私は、藤田先生が企画された最初の研究プロジェクトに客員教官のひとりとして加えていただき、1987年に専任として着任してからずっと、先生と同じプロジェクトで研究をさせていただいた（序、表1参照）。

本稿では、先生の研究のアプローチやご著書、先生から直接ご指導いただいたこと、などを振り返り、その一端をご紹介しますことによって、今後の指針を得たいと思う。

## （1）研究のアプローチ

### 1. 数式で語る

藤田恵璽先生は、わが国の教育測定評価研究の第一人者で、特に、教育という複雑な現象を統計的に解明する分野において余人の追従を許さないと評されている。Lee J. Cronbach（Stanford大学名誉教授）は、藤田先生を、「自分の考えを数式で語れる人」として、高く評価されていたと聞いている。

実際、ごく身近な現象も、先生の手にかかると、高度に洗練された統計法によって見事にその本質が浮き彫りにされてしまう。これには、ただただ驚嘆するばかりであった。

### 2. 理論と実践をつなぐ

理論と実践の関連をとらえながら研究を進めていかれるのも、先生の研究のアプローチの特徴のひとつである。フィールドで基本的な問題を探り出し、基礎研究で明らかにし、実践の場にもどって検討するというように、基礎研究と応用研究とが相互に関連を持っている（この点については、第I部第2章、42ページを参照）。

当センターでは、「映像教材の送り手と受け手の相互作用」（第I部第1、2章参照）、「大学の授業改善」などの共同研究の主査および客員教授として研究を推進された。これらの研究の中にも、1でのべたような、先生ならではのアイデアと手法が活かされている。また、その成果はより良い教材開発や授業実践に役立てられている。

### 3. メディア教育研究の本質

1972年に書かれた論文（藤田、1972）の中で、すでにつきのような本質的な問題を指摘されている。

それは、教育機器は「教育された人間」を育てるために役立たなければならないということである。「教育された人間」とは、「お互いになにをやっているのか本当に知ることができる人間」である。そして、このような「教育された人間」によって、人と人との間の望ましい関係が成立し、生存の喜びが生れると考える。

また、コミュニケーションのメディアの違いによって、情報の質や量がどう違うのか、さらに、その計測をどのように進めるかといった問題が提起されている。これらは、30年以上たった今読んでみても新鮮である。

これには、先生ご自身も、「この論文が書かれたのは、まだ、マルチ・メディア時代の始まる前である。しかし、いま読み直してみても、技術的な発達は急速であったが、われわれ人間の基本的な問題が解決されている訳ではないことに気付くのである。」と書いておられる（藤田、1995）。

高等教育におけるマルチメディアの利用を促進する中核的機関を標榜する私たちにとって、まさに真剣に取り組まねばならない課題といえる。

## （2）研究活動のあり方

藤田先生は、常に広い視野と深い洞察力をもって物事をとらえていらっしやった。それは、センターの研究活動のあり方について書かれたつぎの文章にもうかがうことができる。

「共同利用機関は施設利用や技術支援だけに終わるのではなく、大学、研究者を相手にして研究の支援や指導を求められるのであるから、センターのなかで独自の研究や技術開発が行なわれていなくてはならない。国の内外の研究者や大学人に魅力ある研究所にするためには、とくに若い研究者に自由に創造的な研究の場を確保する必要がある。このためには個別的な研究が各研究室やプロジェクトのなかで発展するように十分な配慮がなされるべきである。」

### 1. センター独自の研究の先駆け：番組分析と視聴行動の研究

先生が着任されてまず手掛けられたのは、放送教育開発センターに根ざした独自の研究を行うことだったと聞いている。赴任当時、教官も少なく、一日中人と言葉を交わすこともなく、教育番組を見ながら研究法を探っていたらっしやったという。こんな中から、教育番組の構造を理論的に解析する手法としてのショット分析のアイデアが生まれたとのことである。のちに私は、映像教材の受け手の立場から、視聴行動の研究に参加させていただいた。これらの研究は、第7回放送教育研究シンポジウム（1987）で発表した。

先生は、また、国内外の専門分野の研究者に認められるような質的に高い研究を目ざしていらっしやった。このことは、当初から、“教育番組を科学的研究の対象に”という目標をかかげられたことからうかがえる（第I部第1章参照）。また、実際に、外国人研究員の受け入れや諸外国の来訪者との研究交流なども積極的になさっていた（第I部第2章、資料参照）。

### 2. 研究プロジェクトの運営

上記のように、センターに根ざした中核的な研究を行うと同時に、全国の大学の先生方との共同研究にも尽力された。

1) サウンディング・コミッティ（反響委員会）：センターを中心とした研究については、全国の大学から参加された先生方から広く意見を聴かれた。すなわち、共同研究にサウンディング・コミッティ（反響委員会）としての機能を期待されていたのである。

2) 自由な発想の場：研究プロジェクトは自由な発想の場であり、参加された先生方ひとりひとりの研究や実践に役立つことを何よりも重視していらっしやった。その基本的立場は、“支援はハードよりソフトで”ということにあるといえよう。

### 3. 研究者を育てる：縁の下の力持ち

研究者の育成については、自らが若い人たちが伸びていくための“縁の下の力持ち”にならねばとおっしゃり、それを実践してくださった。

そのほんの一例として、日常の研究会があげられる。共同研究の全体会議以外にも、センター内外の先生方とのいろいろな研究会を行った。内容は、各自の研究を発表したり、輪読会を行ったり、先生ご自身が統計を教えて下さったりというものであった（第I部第2章、資料参照）。これは、センターの研究開発が、とかく基礎研究がおろそかになりがちなこと配慮されてのことだったと思う。また、研究会などでは、私たちにできるだけ発表の機会を与えてくださった。特に、外国からの来訪者との研究交流の際には、事前に英語を直して下さったり、当日は、さりげなく説明の不十分なところを補って下さったり、まさに、“縁の下の力持ち”ぶりを発揮して下さった。このようにして、同じプロジェクトの三尾先生も私も、日々研鑽を積む機会を与えていただくことができたのである。

私自身は、前任校の岐阜大学教育学部附属カリキュラム開発研究センター時代を含めると、20年以上も藤田先生にご指導をいただいたことになる。この間に先生の慧眼に学んだことは計り知れない。しかし、今、若い同僚たちとの共同研究や、大学院生の指導などを行う立場になってみると、自分の非力を感じずにはいられない。そして、今さらのように失ったものの大きさを痛感している。

以上は、藤田恵璽先生のご功績のほんの一部に過ぎないが、21世紀のメディア教育開発センターを担う私たちにとって学ぶべきことが数多くある。今後も先生の示して下さったことを研究の指針としていきたいと思っている。

#### <藤田恵璽先生のセンターにおける略歴>

- 1985年 4月 放送教育開発センター併任講師（客員教授）
- 1985年 10月 放送教育開発センター教授（1994年3月まで）
- 1989年 10月 放送教育開発センター運営協議員会委員（1993年9月まで）
- 1994年 4月 放送教育開発センター客員教授（1997年3月まで）
- 1997年 3月 放送教育開発センター名誉教授
- 1997年 4月 メディア教育開発センター客員教授

#### <引用文献>

- 藤田恵璽 (1972). 教育機器とコミュニケーション 新教育時代, No.55, 19-24. 世界教育日本協会
- 藤田恵璽 (1995). 藤田恵璽恵作集 1 学習評価と教育実践 金子書房